慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	英文東欧問題参考書一二
Sub Title	
Author	田中, 萃一郎
Publisher	三田学会
Publication year	1910
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.4, No.1 (1910. 7) ,p.122- 124
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新著紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19100700-0122

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新著紹介

英文東歐問題參考書一二

田中萃一郎

一、Racial Problems in Hungary. by Scotus Viator (R. W. Seton-Watson). London. 1908

二、Hungary of To-Day. Ed by Alden. London 1909

九百六年以來匈牙利の政局を左右せる大同團結就中四十八年黨は商相コッシュート等の溫和論者と代議院議長ユスト等の過激論者との間に內訌を招きしが爲、之を基礎とせるウエカーレ內閣を仆せるは勿論、人をして匈牙利政局の前途に對し望洋の嘆を起さしめしが、今や總選擧の結果、四十八年黨の勢力地に墜ち、新內閣は多數の同志を擁して議會に臨めり。但し匈牙利の農民は總選擧を以て豐年に比す可しとなし、黃白の多少によりて四十八年黨を棄つるを敢て辭せずと云へば去月の總選擧の果してマジヤーレンの眞意を代表せるや否やは疑ふ可し、尤もそのマジヤーレン以外の民族の希望に合へることは明なり。

セトン・ゾオトソン氏の著は、匈牙利民族に干する根本的研究の結果にして之を書物製造家の編纂物と同一視す可からず、紙數と時日とに限あるより主としてスロヴケン民族に就てのみ記述せるも、そのマジヤーレンが如何に爾餘の民族を虐待するやの實際は能く之を指摘せり。スロヴケン民族と云はゞその名稱さへも珍らしけれど、ルイ、コッシュートの如きも元來スロヴケン民族に屬すると云へば敎育普及の結果ネーレン、チエヘンと並び稱さるゝの日ある可く、その未だ現はれざるは全くマジヤーレン民族壓抑の致す所なり。英國代議士オールデン氏の校訂に係る「今日の匈牙利」はウエカーレ內閣各大臣等の起稿して各方面より

匈牙利を說明せるものゝ英譯にして、セトン・ゾオトソン氏の著述と併せ讀む時は、以て能く匈牙利の現狀を了解し得可し。而して匈牙利に於ける民族問題の研究の如き、決して等閑に附す可きにあらず、新內閣が如何に之を解決するかは軈て、我對韓政策に向て適切なる敎訓を供給し得べきなり

三、Turkey in Revolution. by C. R. Buxton London, 1909.

金角灣頭の半月旗は果して能く歐大陸を席捲し來れる立憲主義の疾風の爲に飜弄し去らるゝことなかる可きか、とは何人の腦裡にも直ちに浮ぶの問題なるが、バルカン委員の一人として多年東歐問題を研究し、九百八年に土都に革命の起れる後、土耳其の合同進步委員より招聘せられて、新議會の開院式に臨めるバックストン氏の本書を繙く時は又杞憂を抱くの必要なきを感ぜん。開院式の記事皇帝謁見の記事共に活畫幅たるを失はず又サロニカを根據とせる青年土耳其黨活動の眞相を本書の如く明快に叙述せるものは少し。東歐問題研究者は勿論、近世政治史に志すものが見逃す可からざる好著述たり。

四、Greece in Evolution. Ed. by Abbott. London. 1909.

バルカン山南の小王國は九十八年に土耳其に對して無謀の戰端を開きしより、財政は益々困乏を加へ、國威は益々墜夷し去り、列國輿論の同情も去らんとするものあり。就中土都に國會の開設せられし結果青年土耳其黨の民族的自覺心は飽くまで希臘とクリートとの合同を妨げんとし、爲めにアゼンス政治家の狼狽煩悶察するに餘あり。玆に於てか佛國の「ヘレネ主義防衞同盟」會員中の有力家は宗敎、經濟、文學、古跡等の各方面より希臘の現狀を說明して以て一書を爲せり、而して此の、英譯本は、急進主義の政治家として名あるサー、チヤールス、デルクの序文を添えて公にせられたり新聞記者たるペイラーレ氏のマセドニアに於けるヘレネ主義を論ずる一篇の如き、論旨稍や偏頗の嫌なきにあらねど讀んで痛快なり。

但し最近に於ける希臘の國狀を詳かにせんとせば本書に併せて去る四月刊行の The Quarterly Review に見えた Greece and King George の一編を讀むを可とす

三田學會記事

三田哲學會講演大會

近來本塾文學科頓に勃興し、就中純文學の發展は殊に顯著なるを以て同哲學科は稍遜色あるを見るに至りしが茲に同學專攻者十數人聊か察する所あつて相結んで三田哲學會なるものを組織したり而して其第一着として之を具體的に現はしたるものは卽ち去六月十一日半後一時より本塾大學二十五番講堂に於て開催せる同會講演大會なり、先づ幹事堀梅天氏の開會の辭に次ぎ、文學博士遠藤吉氏の「治道家と心理」（偉人と哲學）と云ふ題の下に治道家と隆人間を全體として取扱ふ教育と社會を全體として取扱ふ政治との兩面を兼ぬる所のものなりと說き起して人格と哲學との關係を詳論し、思想を高尙ならしむると同時に一面精神修養の手引となる東洋哲學は大に究むるの要ありと結べり、次に藤井健次郎氏は「道德の根抵」と題し、先づ十八世紀末葉より十九世紀初期に亘れる功利主義を批評し、主觀的道德と客觀的道德とを區別し、吾人が道德上の責任を問はるゝは吾人格が行爲に現はるゝが爲にして人格の如何により行爲の價値も定まるものなりと論及し、結局人格の自覺は道德の根抵なりと結び、最後に會長川合貞一氏は「自我の意識」と題し、先づ近世心理學の由來より說き起し、本論に入りてゼームス氏の自我に關する四個の見解（物的、社會的、心的純的）を擧げ其中の純的自我（ピユアエゴー）は人格統一にして是れ卽ち自我なりと詳細に氏が蘊蓄の一部を吐露したり、散會したるは午後五時にして當日は教授學生等多數の出席ありて甚だ盛會なりき、因に記す、同會にては眞面目に斯學を研究せむとする者の便宜を計り單に文學科に在る者のみに限らず一般に入會を許容する事に決定したり。（ほ、ば）

三田史學會大會

同會は去月十八日午後一時より慶應義塾大學第二十五番講堂に於て第一回講演大會を開き小澤幹事の開會の辭に次ぎ、田中教授は『慶應義塾と史學研究』と題し德川時代に於ける歷史研究より說起し支那朝鮮に於ける歷史研究に及び、それより義塾創立前の學者の研究は史學と經學なりしと說き、義塾創立以來今日に至るまでの歷史研究の概略を述べ更に十八世紀以來勃興したる啓蒙主義唯理主義より十九世紀以來の研究狀態に移り、從來の研究法は科學的研究に非ざるも歷史も亦自然科學の如く一の科學（サイエンス）とせざる可らずと論じて、バツクル、ランプレヒト等の說を擧げ、我慶應義塾大學史學科は正に此任に當るべき重大なる責任ありと結べり次いで阿部教授は、『アウガストヘーベルと其自叙傳』と題し歷史と傳記とを區別して傳記は主觀的要素多しとの前提より、得意の學を振ひて其自叙傳により彼が六十餘年間の落魄たる生涯を語られたり、次で大森金五郎氏は『延喜時代に於ける都鄙文化の懸絕』なる演題の下に、一般に延喜時代は史上の黃金時代として考へらるれど實は是れ都のみに於けることにして鄙に於ては、全く之れと反對の狀態にありと說起し、其當時都に於ける學藝の發達、學者の輩出、貴族の狀態等を述べざれど醍醐天皇の延喜年間諸臣に治國の意見を提出せしめし時、三好淸行の意見書には、都のみ榮え鄙は至つて衰亡せる故之れを救濟せざる可らずとあるが如く都と鄙とは其文化に於て大なる逕庭ありと詳細に論ぜられたり、最後に宇野哲人氏は『儒教の根本思想を論じて支那歷史研究法に及ぶ』と題し、儒の意義より說起して、孔子の根本思想たる仁の意義に及び、我國大化の革新、鎌倉覇府の創設等其裏面は儒者によりて行はれたりと說き、兎に角儒教の根本思想は支那歷史研究の上に必要なるものなりとし、從來支那歷史は手本、目的、濟世等のために書かれたるを以て、科學的の歷史として見ること能はざれども、さりとて凡て學問の研究に於て科學的のみにては無味乾燥なり、學問の研究に於て殊に人間を對象とする精神科學に於ては、人間を物質として見るのみにては不充分なりと論じ、要するに歷史の研究に於ては科學的方法を執るは素よりなるも、從來支那に於ける研究法の如きも或點に於ては全然沒却することなく、兩者相提携茲に始めて研究の効果を得べきものなりと結べり、散會したるは午後五時頃にして川合、神戸の諸教授を初め學生多數の出席ありて頗る盛會を極めたり。（を、あ）

理財學會大會記事

六月十八日慶應義塾大學三十二番講堂に於て理財學會第五十回大會を開き會する者五百五十餘名、創立以來稀有の盛會なりき。今爰に其の概要を揭げん午後一時氣賀教授は起ちて開會の旨を宣し、本會の歷史より其目的を述べ、次で河津博士は不正競爭と商業道德なる題下に兩者の關係を論じ、不正競爭取締方法に及べり、曰く不正競爭激甚なる米國よりも其度甚しき我國にとりては最も注意を要する問題にして、取締その當を得ば經濟上の秩序發展のみならず商業道德に及ぼす効果大なるものなれば、深き研究を爲さゞる可からず。元來自由競爭は今日の經濟界を現出せし基礎たるものなれど、それには明暗二面あるの結果經濟界の階級爭鬪起り貧富の懸隔爲めに生ずるに至れり。之れ勞働問題の原由を爲すものにして、不正競爭は實にその一つを形作るものたり、その弊害多大にして一は世人を欺瞞し他は正當なる競爭者の利益を害し衆人の經濟上の知識缺乏せるに乘じて他を欺き身は經濟上敗者なるに拘はらず勝利者となり、相手の貨物を毀損して以て損害を及ぼし、爲めに正當に營業に從事せる者の地を奪て、劣者の位置に立たしむるに至る等其手段惡辣を極む、是れ近時各國が此不正競爭を防止せんが爲めに諸種の法規を設くる所以なれど果して實績あるや否やは疑問なり。之れ不正競爭と正當なる競爭との分界線を認むる頗る困難なる爲めにして、前述の如く經濟界に於ける大原則た